

2023年4月16日 礼拝メッセージ

「なぜ暗い顔で？」

水谷憲牧師

聖書 ヨハネによる福音書 24章 13-35節

先週は、私たちの主イエス・キリストの復活を祝うイースターでしたけれども、そのイースターから、キリスト教の暦は「復活節」に変わりました。これまでの自らの歩みを悔い改めながらキリストの復活を待ち望む「受難節」から、復活の喜びと希望の歩みを進めてゆく「復活節」に変わったんです。この「復活節」は、復活のキリストが40日の間弟子たちの前に現れ、天にあげられた後、五旬祭の日に弟子たちの上に聖霊が降ったとされる日まで、すなわちイースターからペンテコステの日までの50日間がこの復活節となるわけです。

そして今回の聖書は、イエス・キリストが復活した日の夕方の出来事です。冒頭には、「この日、二人の弟子が、エルサレムから60スタディオン離れたエマオという村に向かって歩きながら、この一切の出来事について話し合っていた」とあります。この二人の弟子が誰であったのか、一人はクレオパという名前が出てきますけれども、彼がどのような人物であったのかはこれ以上は分からない。クレオパと話していた相手のもうひとりの弟子については、名前すら記録されていません。彼らはきっと、イエスが福音宣教の旅をしていた頃に付き従っていた、12人の使徒を初めとする多くの弟子たちの中の二人、つまり、アリマタヤのヨセフと共にイエスを十字架から降ろして墓へ葬り、キリスト復活の第一の証人となった婦人たちと同様、使徒とまではされていない名もない二人の弟子であったのかもしれない。

そんな彼らが向かっていたエマオという村について、聖書についてある地図などではエルサレムの西にエマオを発見することができるのですが、エルサレムから60スタディオン離れていたと書いてあるだけで、実はどこにあるのかははっきりと特定することはできないようです。まあ60スタディオンというと、約11キロちょいですから、100メートル歩くのに2分かかるとすると、60スタディオン離れたエマオまでは約4時間弱の道のりというところでしょうか。そんなエマオへの道すがら、彼らがこの一切の出来事、つまりイエスの受難から十字架における死とその後の復活という一つ一つの出来事について話し合い論じ合っていると、イエスご自身が近づいてきて、一緒に話し始められたというのです。

彼らはイエスの死に大きなショックを受けていました。イエスを失ったことで、非常に落胆していました。というのも、21節にて彼らが自分で言っているように、彼らはイエスのことを、イスラエルをローマによる支配からの解放へと導いてくれる指導者として望みをかけていたからです。イスカリオテのユダもそうでした。彼らは皆、イスラエルのローマによる支配からの解放を夢見ていたのです。そしてこの二人の弟子たちもまた、イエスのことをイスラエル解放のメシアとして誤解し、勝手に期待していたのです。しかしキリストは、そんな個別の事情の解決のためにこの世に降ってこられたのではなかった。キリストは、もっと広い視野で世界を見つめ、人間を見つめて、私たちに絡みついている罪から私たちを解放するためにこの世に降ってこられ、十字架につけられたのです。しかしそのことをまだ理解できていないこの二人の弟子にとっては、イエスの十字架の死はイスラエル解放の夢が砕かれた空しさそのものであったことでしょう。その意味における悲しみをもって、彼らは弟子たちの集団を離れ、エルサレムを後にして故郷であるエマオに帰ろうとしていたのであり、そんな彼らに、イエスご自身が近づいてこられたというのです。

考えてみればこれは、一つの大きな恵みなのかもしれません。彼らはイエスのことを誤解し、正しく理解していなかったにせよ、彼らがみちみち歩きながら熱心に話すことといえば、イエスの話ばかりだったのです。もちろんそれは、彼らの信仰が再び燃え立つような話ではなく、消えてしまった希望のともし火を最後の瞬間まで名残惜しむような話、惜しい人を亡くしたなあ、どうすればあの方が死なずにすんだらうか、などといった話だったことでしょう。しかし、仮に民族解放のメシアの死を惜しむという形だったとしても、イエスのことを思い出しイエスのことを語ろうとするところには、イエス・キリストは必ず近寄ってきてくださり、私たちが新たな気づきや喜びへと導いて下さるのだ、ということを今日のこのエピソードは私たちに伝えているのかもしれません。私たちだって、キリストのことについて話す時、いつも信仰と喜びに溢れているとは限らないわけです。ある時には望みを失って「もう駄目だ、こりゃイエス様でも無理やろ」とぼやいたり疑いにかられていたり、私たちにもいろいろな時があるわけです。しかし私たちがどういう状態であれ、私たちがイエス・キリストのことを思い出し語り合う時、キリストは自分のことが話されている所に必ず来て下さり、その話をじっと聞いて下さる。そして私たちに疑いから信仰へ、失望から希望へ、悲しみから慰めへ、喜びへと導き戻して下さる。そのような恵みが一つ、ここでは証されているように思うわけです。

16節には「しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」と記されています。イエスのことを話している二人のところに、キリストは近寄ってこられたのに、彼らは気づきませんでした。マルコ福音書16:12には「その後、彼らのうちの二人が田舎の方へ歩いて行く途中、イエスが別の姿でご自身を現された」とありますが、彼らがイエスに気づくことができなかつたのは、イエスが彼らの知っているとは違った姿をしていたから、というだけではない。一番の原因は、目を遮られていた彼らの側にあったのです。そういえば、マグダラのマリアも、復活のイエスに出会ったその瞬間には、それと気づくことができませんでした。彼らの目を遮ったものとは何でしょうか。それは、過ぎ去ったことにとらわれて、そこから出ることのできない彼らの姿勢だったのではないか。旧約聖書、ソドムとゴモラが神様によって滅ぼされた時、ロトの妻が後ろを振り返って塩の柱になってしまったように、復活のイエスに気づくことのできなかつた彼らもまた、後ろを振り向いたまま、過去を振り返ったまま、固まってしまっていたのです。私たちも、過去にこだわり捕らわれて、心が鈍くされてしまっている時には、復活のイエスに気付くことができないのかもしれない。せつかく復活のイエスが私たちのそばに歩み寄って下さっているのに、私たちが気付くことができていないだけなのかもしれません。

復活のイエスが、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われると、二人は暗い顔をして立ち止まった、とあります。なんで彼らは暗い顔をしているのか。それは先ほども言いましたように、彼らが過去に捕らわれて心が鈍くなっているからです。過ぎ去った十字架という暗闇ばかりを振り返っていつまでも見つめ続け、前方に明るく照らされている復活の栄光が見えていないのです。「イエスは生きておられる」という言葉を彼らも伝え聞いているはずなのに。「何を話しているんですか」と復活のイエス様の方から近寄って来て下さっているのに。本気で信じようとしていないから、いくらすばらしい知らせを聞いても、そんなはずはない、自分とは関係ない話だ、何の慰めにも足しにもなりはしないと思って、暗い顔をして立ち止まってしまうのです。聖書の約束は、希望のないところに希望を与えてくれるものであるはずです。私たちの問題は、イエスが復活して生きておられるという知らせを受けても、それを信じきれない弟子たちと同じように、聖書の約束を信じて希望を持って受け取ろうとしないところにあるように思います。私たちが疑い迷いの中にあろうと、イエス・キリストのことを思い出し語り合うところには、キリストは必ず近寄って来て下さる。私たちがイエス・キリストのことを心から捨て

去ることのない限り、キリストも私たちをみなしごにされることはない。それは今日の聖書において力強く証されている約束です。その約束を固く信じて、私たちも前を向いて歩いていきたいものだと思います。

そして3人がエマオに近づいた時、弟子たちは、新たな道づれである人物を復活のイエスとは気付かぬままに、エマオの家に招き、食事をともにします。食事の席で、イエスがパンを取り、祝福して裂いてそれを渡されたときにはじめて、2人の弟子たちはその方がイエスであることに気付きました。姿は全く違ったかもしれないけれども、彼らは生前のイエスとのふれあいを再び体験することで、はっと復活のイエスと出会ったことに気付いたんです。そして彼らの目が開け、彼らと一緒にいた人物がイエスであったことに気付いたとき、イエスの姿は見えなくなってしまいます。なぜイエスはその姿を消されたのか。あるいは、なぜイエスの姿は見えなくなってしまったのか。それは、この2人の弟子たち、あるいは私たちが、イエスが復活してまさに「生きて」おられるのだということを本当に理解したとき、もうイエスの姿が見えるとか見えないとかいうことは意味を持たなくなるんだ、そのようなことは問題じゃなくなるんだ、ということを示しているからなんです。

キリストは復活された。今も生きて私たちのそばにいて下さっている。キリストの復活を知らされている私たちは、もはや暗い顔をする必要はないのです。